

1-01 福澤諭吉書簡 和久正辰宛（師範及び中学両校引受の由、勉強専一を祈る）

明治十三年（一八八〇）九月八日

八月廿六日之貴翰拝見、時下残暑尚強、益御清安奉拝賀。此節師範及中学両校御引受之由、御多忙奉察。併何れも次第盛大之由、尚此上之御勉強専一之御事、乍蔭奉祈候。過日ハ由利君えも御逢、岩井氏其外御同席ニ有之よし、同君之為ニは東道ノ主人深被悦事ト存候。右拝答旁申述度、不相替多事ろくニ執筆之暇も無之、略文早々御海容被下候。頓首。

九月八日

福沢諭吉

和久正辰殿 梧下

尚以、時下御自重専一奉存候。乍憚岩井氏其外諸知に、可然御致意奉頼候。以上。

1-02 福澤諭吉書簡 酒井良明宛（門下生二名が三重日報へ赴任することを知らせる）

明治一四年（一八八二）一月二十二日

非常之寒気、益御清寧奉拝賀。陳ハ此度永田一茂、堀省三之両氏、其御地へ罷越候ニ付而は、百事不案内、必ず御世話相成候儀ニ可有之。老生より改而申上候ニも不及旧同窓之親友、両氏共最初より心丈夫ニ出掛候事なり。尚在津之社友御相談、如何様ニも御周旋奉祈候。当地之事情ハ筆を勞するニ不及、両氏より御聞取可被下候。

明治会堂落成、本月廿五日交詢社之一周年会ハ、この会堂ニ催す積り。此度限り中村楼、青松寺之類ハ、社中之為不用ニ属し、快き事ニ御座候。堀氏ハ会堂建築ニ付、最初より専ら担任いたし、不怪勉強之事ニ有之、い才御聞可被下候。右幸便ニ任せ、早々申述候。頓首。

一月廿二日

福沢諭吉

酒井良明様 几下

尚以、時下折角御自重専一奉存候。乍憚令聞え可然御致意奉願。荊妻併子供よりも、宜敷申上呉候様申出候。尚在津之諸氏にも宜敷御伝声可被下候。ヨングメンハ久しく田舎ニ居るよりも、折節ハ都之風ニ吹かれ候様致度事也。

1-03 福澤諭吉書簡 真中直道宛（井上馨主催の観桜会に出席することを伝える）

明治二十九年（一八九六）四月十日

昨日の華翰拝誦。陳ば兼て御話御殿山井上御宅の観桜会、縷々御来示難有奉存候。明十一日  
後一時より拝趨可致奉存候。井上君より懇々の御伝言痛入候次第、何れ拝顔万々御礼可申上  
候得共、尚御序の節宜敷御致意奉願候。右御請まで勿々如此に御座候。頓首。

二十九年四月十日

諭吉

真中様 坐下

1-04 福澤諭吉書簡 小田部礼宛

（年末の挨拶とともに、日清戦争への義捐金を出した心情等を述べる）

明治二十七年（一八九四）十二月十四日

月迫ニ相成、皆リ様御揃いよく御機嫌能被成御座、目出度奉存候。随而私共一同相替義無御  
座、乍憚御安心可被下候。当年ハ夏以来戦争之騒ぎニ而誠ニ忙しく、手紙認候暇もなく御無  
沙汰のみ、御用捨可被下候。今日まで日本之大勝利。この後も同様、遂ニ支那之降伏ハ無之、  
快き事ニ御座候。併し軍隊之人リハ、さぞく不自由難渋之事ならん。これを思へバ、銘リ共  
が毎日たゞみの上に居るも不相濟事之やうニ被存候。せめてハ何か之加勢と存じ、私も金尅  
万円差出し候。私方之身代とてさまでゆたかにハ無御座、尅万円之金を出すハ、人体に譬へ  
て申せば、手足を一本切らたる「れ脱力」と同様ニ覚へ候得共、現在戦場ニ而は、一命をさ  
へ棄る忠臣多き其中ニ、国内に安閑として眠食する者が、身代を分ち棄るハ当然之事と存し、  
右之通りニ決断致す候義ニ御座候。

例年之通り、服部御姉様への御手当、并ニ歳末之御祝儀、別紙之如く為替差上候。宜敷御取  
計奉願候。

右ハ歳暮之御機嫌伺旁申上度、余ハ来陽申上残し候。あらくかしく。

二十七年十二月十四日

諭吉

小田部御姉様 人々 御中

1-05 小幡篤次郎書簡 長谷川善太郎宛（静岡同窓会出席の日程について回答）

明治二十八年（一八九五）三月二十七日

過日は久々にて拝顔、不堪欣慕の情候。陳ば其節御話の静岡県同窓会御催しの節、福澤先生へ臨席の都合承合候処、来月初旬にて差支も無之候に付、日限は御地御会員の御都合にて御取極、御申越し被下候様被申候。此段可得貴意、匆々拝具。

廿八年三月廿七日

小幡篤次郎

長谷川善太郎様

「封筒表」静岡県志太郡小川村 長谷川善太郎様 親収

「封筒裏」封 東京市芝区三田二丁目二番地 慶應義塾 小幡篤次郎

「スタンプ」「武藏・東京・三田・廿八年三月二十七日・リ便」

「駿河・焼津・廿八年三月二十八日・ロ便」

1-08 福澤諭吉書簡 笠原文平宛

（慶應義塾維持資金の寄付を謝し、義塾の将来について心境を述べる）

明治十六年（一八八三）三月十九日

未だ拝眉の機を候へ共一書拝呈、時下春暄を催し候処、益々御清適奉拝賀候。陳ば過日は岡本佶方へ御文通、本塾の維持の事に付御配慮を煩し、資本金御寄附相成候由、同人より承り候。御厚意の段老生に於ても難有奉存候。当学校の義は兼て御承知も可有御座、創立以来二十余年、素より資本金としては一錢も無之、唯同志の社友、或は労力を寄附し、或は少しづつに随て金を出し、教員の俸給の如き、豊ならざるのみならず、全く自家の私事を經營すると同様の心地にて、唯二念なく勉強いたし、十数年は経過致候得共、明治十三年に至ては連も永久持続の見込も無之に付、乍残念廃校可致覚悟にて、其節老生の考に、幸にして塾の負債と申も無之、邸地は百四十坪にして、建物も取集幾千坪、其外書籍等の価を合算すれば、凡十万円内外なる可し。此十万円の商品を売却するも五、六万円には可相成に付、之を従前塾の為め尽力したる教員等へ配分致し、本来の無に帰し可申かと、一心爰に決して社友へ其趣相談及候処、様々議論も有之、結局維持は難し、左れば之れを閉さんとしては今更余念も残り、数日評議の末、兎に角旧社中其外有志の向にて金を集めて暫く之を維持すべしと申多数に決し、爾後各応分の金を投じて、十四年十五年両年は無滞経過致候。本塾にても他私塾と同じく授業料を生徒に課するの法なれ共、少々以て引足り不申、創立以来入社就学者の数は

大抵常に三百各位(目下は五百名)にて、若しも之れを官立又は公立に致候時は、毎歳の入費は少くも三百万に下ざるべし。即ち二十年には六十万円を費したる筈なれども、同志者の協力と乍申恐ろしきものにて、無一錢にて無理に明治十三年までは維持し来りし訳なり。併し人の力には限りあり、且小生も年漸く老して気根も無之、寧ろ早く廢校の策をと申処に、又候維持の方法出来候に付ては、今暫くは立行可申、老生の志願を申せば、此塾を寺院の如き姿に致し、方今は老生住職なれども、逆も豚児へ譲るべからざるは明白なるに付、生前に後任の者を撰で之れに渡し、後任は又第三者へ譲り、其維持の法は同志願者即ち檀家の力に依頼して百年の後にも伝へ候得ば此上もなき仕合なり。既に唯今屋敷地の地券も小生の名義なれども、誓て倅へは譲り不致覚悟にて、家族並に朋友共へ毎度話置候事に御座候。故に此度御寄附に相成候資金も、云はゞ檀家より到来致候ものにて、既に檀家とあれば今後共此寺の事に付ては何品に由らず御注意又は御助言被下度、実は老生も二十余年の月日を消し、心身を勞し又随て身分不相応の金を費し、最早疲勞致候訳なれば、何卒追々後進の学者へありのまゝの学塾を挙げて譲り渡し度心事に御座候。右御礼に兼て本塾の情実申述度如此に御座候。余は又次便可申上候。早々頓首。

三月十九日

福澤諭吉

笠原文平様 梧下

尚以時候折角御自重專一に奉存候。御序の節令弟へ宜敷御致意奉願候。  
昨年九月出来候写真一葉拝呈致し候。老顔御一笑可被下候。

2-12 福澤桃介宛門野幾之進書簡(時事新報社の更生について)

昭和八年(一九三三)カ六月十三日

拝啓 時節柄兎角鬱陶敷候処、其後御起居如何に候哉。御伺申上候。扱兼て御心配相願候時事社之件に付御相談申上度儀も有之候得共、御保養中却て御迷惑と存候為め池田氏等と相談、先以て山本昌一氏を中心に、小生も従前通り会長として小生私財の容るす限り又一方は出来得る丈節約の自力更生之覚悟舎弟重九郎も充分助勢之積りに御座候。鐘紡より入社したる人以外は可成人の位地は動かさぬ事に致度と存候。尚委細は御帰京相着之上可申上、先は御機嫌御伺旁大畧申上候。

草々拝具

六月十三日

門野幾之進

福澤桃介様

座右

〔封筒表〕伊豆国熱海 (以下欠) 福澤桃介様 至急親展  
 〔封筒裏〕六月十三日 東京市麻布区東鳥居坂町九番地 門野幾之進

3-05 小川武平宛小川三藏書簡 (福澤諭吉との面会の様子を知らせる)

明治九十年 (一八七六―七七) 頃五月七日

五時頃須賀邸出立致し其夜木下泊り翌日其村之鳥屋道連れと相成候。扱拙儀も少々荷物持し故同情被致候に付、行徳より船に乗り候得共、右人之荷物多分故手間とれ其夜新橋泊り、翌日栗田様へ参り候処、先生他行故門弟へ厚礼述べ候処、奥ノ間へ除〔余カ〕儀なく案内被致約介に (相成) 頼り俊に式人にて時移し、夫より三田へ参り候処、主人他行故内義へ御礼申述候処、御手前親父病氣如何に候哉、又其御手前儀心配之由被申候得共如何いたせし哉と被申、拙能き折と委細申述候処へ主人帰宅いたし、御手前は能くこそ御出被成、縁付候処離別候やと被申候に付、其儀は縁家之石原氏頼み来り候に付心配無之と申せし処、主人安心いたし候。扱御手前は何等之商法に目的致候やと被申候事に付、私義は大老番に先生の力添へに成りたき、次には長沼村之為筋にも成度と存候と答けるに如何にも利之□□せんにも有之候得共、中沢私しは力添へ之儀は氣に入り不申候に付、外に何んぞ望み有る殊は無之哉と被申候に付、扱拙儀は大老番に人民へ広く交り度、其存念より外に無之、広き世界に少き朋友を多く求メタキノ存念に候。其存念とは朋友に我身短を補はれたし、次には老村無事に成行を求めて先生の御おんに報すると云んと申述候処、中沢氏恐悦いたし候。翌日周三君同々に先生参り候処、先生米搗致居候。中沢氏搗場へ立寄り、長沼村武平二男先生へ拝顔いたし度きに付参り候ともうせし処先生のいふよふ今米搗終りし後に合ふと云に依て書生寢屋待居ながら先生の米を搗有様見候事に、碁盤しまの大果物 (ママ) を着し頭に無地浅黄の手拭を俗に云地象冠りに致し大声を上げて米を搗有様実には龍虎の如し。如何にも人間業さには有間敷と見居候事に間もなく米搗終りしと咄に参りしより直様罷出中沢氏先生に向へ此人は武平之二男三々云いしも終らぬ内、先生より近ク来れとよと云ふに付、罷出御礼に願シ段申述候処、中沢、先生二向へい、候事に三々儀はしはらくとうけへに□□り居たき由と申せしところ先生拙にい、候事に御手前は書ヲ読みたき存念力又は商法いたす積りかと不 (被カ) 申候事に付私しは厚恩を報へ度に付、衆人につき合を求めて村の平穩を祈る積に候とひいしところ先生拙に向へ言候事に御手前は本を讀し事有しや又五十盤はと被申候事に付、私しは無筆の者に候と云候処、先生云候事二夫ては目的付難きに依てほんは何にく、五十盤は何にく、位と明白に申述よ又は其間好き不好きは有る者故被申よと言はれしに付申述候処、直様錢儲に成る殊致し度哉と被申候に付、拙は少しも沼前に儲度存念は無之と申述候処先生云、候事に二ヶ月成り半年なり稽古いたし候上にて東京へ店を出し長沼の安す物も持

来るへし。東京はいふもさらなり。馬力者の寄集り故勉強專一に被成候はゞ利を得て心定なり商法も勉強いたし又本も読べし講議聞べしと申被渡候に付直様中澤氏帰り居候得共実弟の如く致し被下便候様と申述候ても急ぐべからず。更に聞入す。甚だ約介之段迷惑に候間、是非共近日御入来之程願候也  
五月七日

同性〔姓〕三々拝

小川武平様

〔封筒表〕下総国埴生郡長沼村 小川武平様 東京 三田より

〔封筒裏〕〔欠〕廿七日発 長沼村

3-07 小川桂三郎宛犬養毅書簡（小川武平の逝去を悼む）

大正四年（一九一五）九月四日

敬啓 尊大命死去之趣御通知に接し不堪悼□之至不取敢茲ニ切弔慰申上候 勿々不具

九月四日豆州 長岡にて 犬養毅 小川桂三郎殿

〔封筒表〕千葉県印旛郡長沼 小川桂三郎殿

〔封筒裏〕東京市牛込区馬場下町 犬養毅

〔スタンプ〕上「静岡葦山 4. 9. 4 后216」

中「千葉安食 4. 9. 6 前912」

下「佐倉 4. 9. 5 后216」